

島根県ラグビーフットボール協会

—— これまでのあゆみ

本協会は、昭和57年のくにびき国体へ向けた強化の一環の中で産声をあげた。当時のラグビー界は、大企業の社会人チームと都市部を中心とした学生チームという構図で、本県は不毛の地とも呼ばれている状況だった。

そのような中、[※]福田(旧姓渋谷) 省二監督を中心に地元の人材を徹底的に鍛え、他県とわたりあった少年チーム、中央で活躍していた選手と地元選手がワンチームとなった成年チームの活躍は、県民に大きな感動を与えた。その後、高校生世代の活性化が図られ、[※]河原(旧姓森山) 健次監督の松江高専の全国高専大会制覇が特筆される。また、ラグビー会場となった浜山公園の名をとってつくられた浜山ラグビースクールには、多くの子ども達が参加することとなった。

その後、4チームあった高校チームも減少し、社会人チームへの加入も減少の一途をたどることとなった。その中で、石見智翠館(旧江の川) 高校の活躍は目覚ましく、島根県のラグビーを全国区へ押し上げることとなった。特に平成5年の石見智翠館を中心とする少年チーム



昭和57年 くにびき国体成年男子



平成5年 東四国国体で優勝した少年男子

は、井場浩監督、梅本勝コーチのもと国体優勝を遂げ、大きな成果をあげた。

—— 現在の状況

ワールドカップでのジャパンの活躍により、ラグビーを観るファンは大きく増えたが、プレイヤーの獲得には、島根県としてはなかなか結びついていない。

近年、ラグビースクールにおいてジュニア(中学生)部門を新設し、小中学生の募集をしたり、タグラグビーを通して普及活動を積極的に行ったりしているが、部員の拡大には道半ばの状況である。特に中学部門は、学校部活との連携が必要となり、推進には工夫が必要となっている。

高校部門では、石見智翠館の躍進が続いているが、他校は単独でチームを編成することができない現状である。小学校から中学校、中学校から高校へといかにつなげていくのか、有効な接続のあり方に試行錯誤しているところである。そして、この接続の課題が、地元の社会人チームの部員獲得の困難さにもつながっていく深刻な流れとなっている。

—— これから

これまで多くの先達が、さまざまな機会をとらえ、ラグビー競技の魅力を伝えたり、競技力向上へ尽力したりしてきた。その先達の教え子らが、さらにその意志を受け継ぎそれぞれの立場で新しいものを生み出そうとしている。

一方で、中央の協会の流れとして世界で勝つことにフォーカスされていく傾向も感じている。本協会としては、一人一人の子ども達の健全育成を大切に、ラグビースピリッツであるワンフォアオール、オールフォアワンの精神を、島根の子ども達のよりよい育成に役立てたいと考えているところである。その中で他競技とも共存共栄を図ることができるよう、既成概念にこだわらず新しい取り組みを創り出していきたい。

今回の2030年島根かみあり国スポをよい機会として捉え、県内に芝生のグラウンドが広がり、子ども達が楕円球を持って走り回っている風景を増やしていきたいと夢見ている。